



# 研究

## 西藏の歴史産業交通の概況

H  
T  
生

### 西藏は世界の屋根

世界の屋根とも言はれてゐる西藏、このチベットは最近まで全く世界の謎であつた。世界地圖を開いて見れば判明するが如く、西藏は東徑七十八度から百三度まで、北緯二十七度から三十九度に至る地域がそれである。而して丁度我が國の朝鮮と臺灣を含んだ廣さの約二倍半に當つてゐるが、南境には世界最大の山脈である、例のヒマラヤ山

脈が東西に走り、北は崑崙、東は印度支那の兩大山脈が相連なつて、この雄大なる大山脈によつて圍まれてゐる高原が即ち西藏である、従つて其の地勢は國內にて山脈は縦横に走りて山嶽重疊をなしてゐるのみならず、彼の世界の最高峰たるヒマラヤ山脈系中のエヴェレスト又はカンチンヂヤンガは印度との國境に遙かに空を突いて聳へて居る、其他にも海拔二萬尺以上の高峰は多くために西藏全體が海拔

一萬尺乃至一萬六千尺の高地である。世界の屋根と呼はるるのも故なきではない。かやうに西藏の地勢は世界何れの國にもない高所に位してゐるので一見寒氣は激烈であるかの如く考へられるが、一二月の最も寒い時期でも零下二十

度たるは稀れにして大體十五六度程度である、然し北部のチャンタン地方では西藏のうちに於いて寒氣最も厳しく夏期に於いても毛皮の衣類を必要とする位である、七八月の夏期では最高温度は華氏八十五六度に昇るが雨量は夏期に多く冬期は殆んど晴天続きである、かの印度の大河であるガンジス・インダス・ブラフマプトラの大河を始め支那の揚子江、泰のメコン河等は總てその源を西藏から發してゐる、殊にブラフマプトラ河はチベットではヤルツアンと云つて水源は西部のマナサロワル湖から發して中央部を西から東に横斷して非常に西藏の耕地を潤ほしてゐる、又西藏の如き高地にマナサロワル、ツオゴンポ、テンゲノル、ヤムド、ハモナムツオ等の湖水が東北端並に北部中部南部にあつて殊にマナサロワル湖の如きは海拔一萬五千尺の高所

にあつて、彼の佛典で河耨達池又は無熱惱池と書かれてゐるのはこの湖水を云ふのである。

#### 西藏民族と政治機構

現在の西藏住民は中央西藏の衛州、西部西藏の藏州、東部西藏の喀木、北部西藏のホル、及び印度カミユミールに接續したるガリ地方の五種族に區別せらるゝが、東部及び西部西藏人は剛直慍悍であるが佛教の感化に依つて性質は漸次柔和となつてゐるも邊疆方面の西藏人は今尙ほ蠻風があつて殺伐を好み外人と見れば殺害を加へることは屢々ある有様である、一體西藏民族の起りについては種々の説があるが、その主なる説は最初は中央亞細亞に起つて後ちトランスヒマラヤを通過して西藏の中部に來たと云ふのと、西藏史家プトンの所謂西藏人はその祖先は印度人であると云ふ説である、又あるチベット研究者は西藏民族は中央亞細亞から移動して來た蒙古種に印度及び漢民族の血液が混合して出來た人種であると云つてゐるが、兎に角現在のこの西藏に住んでゐる所謂西藏民族なるものは其の人口は精確

なる統計がないから判明せないが約三百萬人位と推定されてゐる、従つて土地の廣大さに比較して人口密度は極めて稀薄であると共に全體は西藏民族の一種から成立つて居る。而して西藏の政治組織を見てみると却々面白いのであつて、即ちラマ教と絶對不可分の關係にある政治機構であつて、従つて西藏政府の組織もまた宗教行政である。これは西曆十七世紀の時代にダライラマ五世が政教の兩權を一手に掌握してからであるが、勿論その以後は西藏全土に互つて政權を握つたものは無く従つて號令者が存在しなかつたのである。現在もダライラマに依つて宗教上では法王であり又政治上では國王として政教兩權を一身に把握せる統治者として君主專制であるが、元々西藏は支那の屬領の如く見られ亦英國の保護國の如く觀察するものもあるが、形式上の宗主權が只だ單に支那にあつたといふのみと、英國の西藏關係は英露支の三國條約の範圍を出でないものであるから西藏は事實上の獨立國である、政府は拉薩郊外のマルボリ丘上にあるが、これが宮殿を兼ねて全部城塞であつ

て、宰相の居室、閣議室百官の事務所等の政府機關並に佛殿、僧堂、僧役宅、並に銃器、食糧等の倉庫等總てが此のダライラマの宮殿内に設置してある。政治の運用はダライラマの下にルンチエンと呼ぶ宰相に似たものが居て、又その下に四名程のシャペと云ふものが居て合議して諸政を處理してゐる。このシャペは即ち閣員に該當するものであつて、シャペとはダライラマの蓮臺下に奉仕するといふ意味である。

#### 西藏の財政、司法、軍事

全體、西藏の諸政は全く宗教の理解がなくては行はれないのであつて、夫れ故に政治は即ち宗教であると云つても過言でなく、この閣員即ちシャペにも必ず僧侶が加へられて居る、シャペの下に大藏陸軍司法の諸官廳が配屬されて居る。地方は十三州五十三縣に區分して各縣に知事が居て行政事務を取つてゐるが、四縣だけはパンチエンラマに直屬して中央政府の力は茲には及ばないのである、司法官はセバンと稱して拉薩の治安部にはミブンと呼ぶ長官が居て

治安維持の任にあつてゐる、この西藏の法律は止惡作善の十善の法を原則としてゐるが、實際は刑罰は頗る殘酷であつて嚴重な規定があるのでなく治安行政と司法とは混同したやうなものである、財政は主として租税に依つてゐるが、物税と血税に分かれてゐる、即ち物税は地方々々に依つて異なるが、耕作地域では麥を納入し、牧畜地域では乾肉、羊毛、獸皮、バターと云ふやうなものを納め、織物の出來る地方では織物を納めると云ふ風である、血税は即ち勞働税であつて徵用には種々の方法があるが、徵用人は麥の耕作又は道路橋梁の修繕、布設等種々の方面に使用されるのである、而して面白いのは西藏全土四萬餘の僧徒は墨然納税の義務なく又ダライラマの住む拉薩は無税地區である、故に拉薩に住む住民は何等納税の義務がない、これは拉薩はダライマの安住する神聖なる土地であるから無税と云ふのであつて頗る不公平である、國庫支出は政務費と警團維持費とに半々されてゐるが、政務費の支出は現物支給である、宰相大臣等は莊園が附與されてゐるが中流以下

の役人は現物が給與されてゐる。宗教團體に對する支給も亦現品配給であるが、これには一部現金でも給與されるのであつて、政府には寺院のために固定した基本金が存在してゐる。軍事については何等見るべきものがなかつたが、二十五年程以前支那軍が拉薩に侵入して彼等の云ふ所謂聖都が戰亂の巷と化してから國防兵備が痛感せられて現在では稍や近代兵制に近い制度が行はるゝに至つたが、徵兵は男子十八歳から六十歳までを適齡として各縣地方別に耕地反別に準じて人數を割當るのである、これ亦面白いことには體格検査などは全然なく、徵兵が中央に集まると、老少強弱種々雜多であると共に老朽者は番兵等に當られ馬を連れて入營するものは騎兵に採用されるのであつて、各地方の地主は兵士を徵募して中央政府に送る義務があり、又その糧食は地主から兵士に送られるのである、非常時にはセラマといふ僧兵が結成されて教團の保護に當るのである、訓練は最初は支那軍隊にならつたものであるが、其後英國、日本、露西亞の各式に教練してゐる有様で我國からは

矢島保治郎氏がこれに當つてゐたが、離宮の後庭に日本式兵舎を新築して號令も日本語でしたが成績は優秀であつて、ダライラマ十三世の親任を受けて親衛兵になつた程であつた。

### 西藏人の生活狀態

西藏人の生活狀態については相當に研究する價值があるが、先づ住宅を見ると普通煉瓦の六倍程の自然石を並べてその間を粘土で詰めた高さ一丈位の壁を作つて四方を圍み内側の廣さに準じて柱を立て棟を渡して其の上に石板石を置いて、更に粘土を詰めて天井となし、この天井が二階三階の場合も同様であつて、最後に屋根を築くのであるが下級のものは博造である。一般の家には中央に中庭をとつてあり、一階は厩舎又は物置に當て、二階は居室、臺所、三階建になると客間居室等に用ひてゐる、大體部屋の大きさは八疊位は普通であつて内部は赤若くは紅黃の塗料で塗つてある。尙ほ種々の色彩を施して頗る華美の繪畫が畫かれてある、部屋には七八寸位の座布團を敷いて安坐するので

ある、中流以下は數家族と共住して居るのである、食物はツアンパといふ麥の糝り粉を常食としてゐるが、食事は朝夕二食で朝食は例のツアンパのみを用ひ、夕食は肉團子、肉ウドン類を食し、上流家庭では時々米飯も食することがある、西藏旅行者の談に依ると、重要な客を優待するには西藏式食事と支那式食事との二様式があつて、何れの場合でも先づ朝食から饗應するのが慣例であつて、朝食はツアンパに肉の焼つたものを二三品添へて出すが十時頃また米飯をバターで焼めたものとヨーグルトを出す、更に午後二時頃になると玉子で練つたウドンを馳走する、夕方は正食で支那食の時は大體支那料理に似たものであるが、西藏食事式には釐牛又は羊肉の水炊或るは血の滴る生肉を盛つて出すこともあるそうである、併し西藏人はラマ宗教上から豚肉魚肉鶏肉は古くから食することをせぬ習慣である、服装に至つては男子は西藏在來のものは右前にて帯を結んで、袴袴があつて袖は手がかくれる程長く稍や我國の筒袖の着物に似てゐるが、なかには蒙古及び支那の服裝の

影響を受けたものもある、上流では緞子又は外國製の羅紗等を用ひ、下流社會では綿布或るは西藏産の毛織物を用ひてゐる、式服は高級役人の所謂官服は黄色の龍大紋の模様がある緞子であつて一般民衆は濃茶又は濃紺である、履物は底は刺子で脚部は脚絆となつてゐる、帽子は役人は官職に應じて異なつてゐるが、貴族は髪を髻に結びつて、頭頂に約二寸程の金製の護符箱を結び付けるのであるが、庶民は辨髪である、女子は男子の服裝の袖のないものを着用して髪飾、耳、胸等には眞珠、珊瑚、青玉石、或るはダイヤモンド等色々の寶石を以て造られたる裝身具を用ひてゐる。

### 西藏の歴史的觀察

翻つて西藏の歴史を見ると現在でも同様にこの國の歴史はラマ教とは全然離るゝこと能はざるのであつて、其の大意は三世紀の中頃に佛教は初めて印度から西藏に傳來したものであるとチベット研究者に依つて云はれてゐるが、稍や具體的に現はれる西藏史は西曆五百六十年頃から六百五十年即ち六世紀の中頃から七世紀の中頃である、當時ソング

エンガムボと稱する人物が西藏に現はれて漸次西藏を統一して其の威風は四隣を壓したので、東は唐西は中央亞細亞邊りからも西藏に修好を求めて來たといふ有様であつてこの人物が王となり印度支那の當時文明國から諸制度を入れて都を拉薩に築き宮殿を造營して以て現在のチベットの基礎を造り上げたのであると傳へられてゐる、然るにこの傑物の死後約一世紀の間は何等史的記録がないが七百五十五年にテソングエン王が現はれて「ソングエンガムボの系統」チベットの國威は再び輝き其の勢力は遙かにパミール高原を越へて土耳其アラビヤ等と境が接するやうな廣大なものとなつたと云はれてゐる、この王は佛教の興隆に非常の力を盡したのであつたが、印度のベンガル州から高德のポーデイサツトゾを拉薩に招聘して王自から菩薩戒を受けたり、其他多數の僧侶を西藏に呼び又は拉薩の東南六十哩のところサムエ寺を建立して西藏國の鎮護としたりしたのである、西曆七百八十一年にテソングエン王は歿したが、ムニツエンポ、セナレクが王位を繼承し續いて八百十

四年にはテ・レルバチエンが即位してゐる、其後幾多色々の變轉を経て十四世紀末にツオムカバが現はれて蜜教で頽廢したる空氣を一掃せんと大改革運動を起して當時ラマ教研究の専門寺たるレゴンテル、ネタン、ナルタン、サキヤ等の諸寺を歴訪して佛學を究め實際の修行を積んで蜜教を新しく學問的に組織して茲にツオムカバ一流の新蜜教を築き上げたのである、現にツオムカバの代表的著作として顯教では菩薩道次第論と蜜教では眞言次第論が佛敎界では有名である、斯様にして彼は嚴格なる戒律の上に顯蜜二教を築いて舊來の墮風を改革せんとしたのであつた、これを從來の敎の紅帽派に對して黃帽派と名付けたのである。ツオムカバは千九百四十一年六十三歳を以て入滅したが高弟ダムカバが法燈を繼いで爾後現在まで三百三十餘代に及んでゐるが、この法王職がガンデンテバと稱して黃帽派ではダライラマ、パンチエンラマに次ぐラマの榮位である。ツオムカバの他の遺弟等は西藏國內各所に寺廟を建立して黃

帽派の敎義を宣布したが、中でもゲドウンドゥブは德望高く世々化身として轉生すると考へられてゐるが西藏法王ダライラマは實に淵源を彼から出てゐるのである、其後黃敎派の勢力は次第に紅敎派を壓して現在十四世ダライラマに達してゐるのである、而して現在のダライラマ十四世の即位式は千九百四十年三月二十二日に拉薩ポタラ宮殿で擧げてゐるが、青海西寧附近で生れた人であつて、ダライラマが即ちチベットの政權と宗教權とを掌握するのである。

#### 西藏と對外關係

今度は西藏といふ嘗ては世界謎の國であると思はれて居た國の外交關係をみると、西藏統一政府が成立してからの對外關係は十八世紀後半に起つたネポールでグルカ族が漸次勢力を得て全土統一すると生來好戰的の民族であるから國家統一終了と共に西藏を敵國視して攻略前提として先づシツキムを攻めたネポール事件が発生したが、當時清朝の後援を得て解決して居る、其後の主たるものは千八百八十五年彼の英國のマコレイが西藏と英領印度との關係につい

て西藏代表と會見して居るが、英國と西藏間の外交交渉の最初である其後千八百九十九年印度總督は西藏に對して國境確定に關する提案をなしてゐる、一體英國の西藏に關心するのには印度防備上の理由と第三國即ち蘇聯等の脅威が西藏に及ばぬやうに緩衝地帯として現状に置くに必要な意圖から出てゐるのであつて、英國の西藏に對する外交方針はこの線に副ふてゐる、露國が西藏に根據を置いて印度に出で大洋への出口を見出さんとする深謀を英國は看取して英國は印度防衛上遂に千九百三年に至つてヤンクハズバント大佐の指揮する一個師團が西藏に侵入して西藏軍と國境で戦つたが、劣等なる武器は近代精銳の兵器に對抗出來ないで西藏軍は敗戦退却を餘儀なくされてドライラマは外蒙庫倫に亡命したのであつた。英國軍は首都拉薩に入城してドライラマの代表と西藏政府の要路と會見して支那政府代表とブータン國王が調停に立つて西藏、英國間に自由貿易を認めること、賠償金を支拂ふこと、西藏は第三國に土地の割讓租借を許さず、又通路鑛山等の利權を提供せざるは

勿論第三國との外交交渉を禁ずること等が條件にて英國は西藏遠征軍をその首都拉薩から撤退したのであつた。英藏問題は其後に於ても千九百六年に英露支の三國が北京で宗主權を支那にあることを確認すると同時に英露支三國の何れも西藏の内政に關しては干渉せざることを條約を締結して居る、嘗てドライラマ十三世は拉薩をのがれて北京に滞在申日本の公使にも招待されて官邸に一週間程逗留したことがあるが、その歡待に感激して日本から西藏に赴いた本願寺法主大谷光瑞の代理である大谷尊由と會見して日本と西藏佛教の將來について親しく意見の交換等をなしたとのことである。清朝は自國勢力を西藏に扶植せんがため千九百六年から九年までに西藏に軍隊を送つて西藏の東西の要衝を占領したことがあるが、其後英國が清朝と西藏との間に立ちて支那軍の撤退を要求して支那軍が本國に引上げたので千九百十二年印度に亡命中であつたドライ十三世は拉薩に歸つたが其後更に藏支國境問題が起り、西藏か自己の領内と思つて居た國境地方に支那政府は西康青海の二省を



新設して内蔵と稱したので紛糾を來たしてこの國境問題を解決するために千九百十三年十月から翌十四年四月まで英藏支三國代表ガムラに會合したが、意見の一致が出来ないうちに第一次世界大戰が勃發したので有耶無耶になつて仕舞つたのである、西蔵は屢々英支の勢力に禍いされたが、併乍ら政治經濟は勿論内政も何等英國の制肘は受けてゐない、又支那の宗主權も實際名ばかりである、主權は西蔵が自身保有して居るのであるが、今次の世界大戰は國際情勢の一大變動を來たすと共に西蔵の立場も亦興味ある問題であるが、大戰後亞歐と結び付ける空路の中途基地等種々西蔵は登壇して來るやうに觀察されるのである。

### 西蔵の産業について

西蔵の産業は現在では農業と牧畜が其の主要産業であるが、牧畜は農耕に適しない不毛の地域で大規模に行はれてゐる而して犛牛と羊が飼養の主なるものである、併乍ら何等の施設はなく全く放牧である、犛牛は最も西蔵の氣候に適する牛の一種であつて運送用に使用せられたり又其の肉

は食料としてゐる、羊は肉はやはり食料ともなり羊毛は衣類又は絨氈の原料となつて西蔵の需要を充たすのみならず印度方面にも相當量輸出せられて西チベット隨一の貿易品であるその數量は一ヶ年約三百萬貫とのことである、農業は主として大麥、小麥、大豆等の順序で産するが、元々西蔵は一般的には不毛の高原であるのに加へて肥料も施されない自然のままの土地であるが故に、收穫の如きも一升の種麥で僅かに六七升をとる有様であるから推して知るべきである、米は南方一萬尺以下の地では多少出來るが、極少量であり來客接待用及び儀式に用ゆる程であるが多く印度から輸入してゐる、要するに西蔵の主たる農業は現在に於いてはその技術的方面にて何等の指導もなく只だ自然的の農業状態であるから従つて其の生産額の如きも頗る效果學らず、先ず原始的農業と云つて可なりである、地下資源に於いては確たる調査研究の資料がないから判明しないが、西蔵は相當豊富なる地下資源を持つて居るやうである、即ち西部インダス河の上流の砂金は既に世界で有名である

が、南部地方でも金埋藏地は多數あるとのことである、亦金鑛の外マンガン・水銀の産出もあり、北部には鉛、亜鉛、硝石、硫黄、岩鹽を産出し又中部には磁鐵鑛がある、更に石炭、石油の如きも北部國境方面には相當の資源があるが、採鑛法は極めて幼稚なるのみならず、西藏人は大地を掘ることを喜ばない習慣があつて却々開發は容易ではない、併乍ら西藏には實際金は相當多量に埋藏して居るが國人は金鑛を黄金の母胎であると信じてこれを採掘すると黄金は世の中から姿を消して仕舞ふために砂金のみは採掘しても差支へないが金鑛は却々採掘せないのである、現に金について面白い話は西藏政府は自國の産金を以て我國の金貨二十圓を模倣して金貨を鑄造したことがあつたが、大衆はこれは純金ではないとて流通は却々困難であつた、夫れを印度で分析したが全くの金貨で高價で取引されたので印度との通商に當つてゐる商人達は西藏外に持ち出して巨利を得たので新金貨は西藏國內では直ちに拂底して一時恐怖を來したのであつた、西藏政府はこれは英印政府の仕業と

思ふて金貨鑄造を禁止し更に金の採掘も嚴禁して金鑛の鑛道も閉ぢたのである、このやうなこともあつたが、兎も角西藏は鑛物資源には豊富たることは疑なく、さりながら何等見るべき開發は現在行はれて居ない有様である、若し將來西藏人の覺醒と科學的に研究して開發に乗り出せば相當效果の見るべきものがあらう、要するに西藏の産業はその主たる農業にせよ、又牧畜にせよ、更に鑛業にせよ全體を通じて觀察すれば未だ頗る幼稚の區域を脱せず、何等語るべきものがないが、併乍らこの國の地下資源は豊富であるから總てを近代科學の力によつて開發に努力するならば大いに期待出来るのである、序いでに西藏の貨幣制度を見ると全くこの國は近代まで物々交換であつたが近世蒙古方面よりラマに獻金として來る馬蹄銀を材料として凡そ日本の二十五錢に相當する銀貨を作つたが、茲にも面白いのはこの一種類のみであるから民衆は補助貨幣がないためにこの銀貨を適當に切つて使用したのであつた、現在から三十年以前に三種の銀貨と四種の銅貨が出來たが又二十年程前に

文明諸國に倣つて紙幣を作つて發行したが西藏人は紙幣と云ふものには何等の理解もなく却々通用せざる有様であつた、又一方では偽造紙幣が現はれたので其の防止には却々骨を折つたやうであつた。この紙幣と云つても正貨準備と云ふやうなことがなく全く一個の紙きれである。斯くの如き有様であるから西藏では主として銀銅貨が通用して居るが地方ではまだ物々交換して居るところも多いと云はれてゐる。

#### 頗る幼稚な交通狀況

次いで西藏の交通状態をみると、これ亦産業開發的にも國防的見地からも何等の考慮は拂はれてゐない道路建設の如きもその都度々に依つて思ひ付きのやうに所謂血税で少しはやるが、極端に云へば今尚ほ我國の戰國時代或るは夫れよりも更に古き時代の交通状態を思はしむるものがある、勿論我國の古き時代の交通機關とに比較して相當違つてゐるが、西藏には驛亭制度といふものがあつて、これは國道に沿うてゐる縣地頭が持馬を提供して夫々替馬の義務

を負ふて交通の便利を計るのである、これも耕作地と比例して負擔する一種の血税であるが、その替馬には乘馬用と貨物運搬用との區別があつて、又距離の點に於いても部落相互間の短距離と縣廳より縣廳との間の如き相當長距離のものがあるが替馬には當然馬丁も附して殊に遠距離の場合には馬丁の食糧並に馬糧を携帶するのであるからこの負擔は相當多大であるので幹線國道の地頭等からは絶へず苦情が出るのである、勿論この替馬を出すのは政府の役人等の旅行の時である、更に驛所では替馬を出すばかりではなく旅行者の宿所の心配を當然するの義務があるのであつて地方出張の役人等は宿所に民家が充られるのである、又高級官吏等の旅行に對しては西藏政府は旅行券を渡して夫れに燈用油と燃料の牛糞を支配せよと明記してある。而して宿舎は其の配給を縣又は地頭に申請する組織になつてゐる、全體西藏には旅館の設備はなく旅行者は全部民間の適當なる家屋に宿泊するのである、大臣格の役人又はラマの侍従の如きものが官命に依つて地方へ出張する場合は一尺四方

の赤い布に旅行者の名前と目的及び日時等を認めて西藏政府の公印を捺したものを矢の端の旗に付けて一週間程前に送るのであるが、これを持つた人夫は縣廳まで走り届けるが、受取つた縣廳では更に次の縣廳に人夫を替へて届けさせるやうになつてゐる、而して沿道の民衆もこの矢旗には敬意を表するのであつて、細かい負擔が地方では相當加へられるのである。現に地方中産階級の民家の如きは常に二人位の下僕を雇つて血税のみに充てる有様であるから國税縣税更に地頭課税其他雜税のため地方民衆は非常に疲弊してゐる状態である、而して西藏の交通機關は前記したやうに主として馬及び車に依るのであるが國道に於いてすら全く原始的の區域を未だ脱せないから車による輸送は馬に劣つてゐる、尤も稍や人口の集密してゐる所謂都會「ホンノ名のみ」では道路に岩山の岩を割つた割石若くは玉石煉瓦等を敷いてあるところもあるが山地山越の道路は砂利、砂を含むが故に所に依つては路面としては縦斷の不陸直しか充分に行はれ維持せらるれば路盤は強固であるが、左様で

ないから路面通行が却々容易でない箇所が多いのである。

### 西藏の道路と血税

またこの國の道路の幅員は國道にしても區々であつたところに依つては十米位の所もあり又頗る廣い十八米又は二十米位あると思ふところもある、即ちこれは道路の幅員などに何等考へが及んで居ないからである。而してその道路は往古から自然的に人馬が通ふたところを道路としてゐる有様である、橋梁はまた古來から架設せられたものであるが、石橋又は土橋が主たるものである、政府は道路經費或は橋梁費など全然見積らないので故障修理するやうな能力が無く故に殆んど顧みられない状態であるが、只だ地方廳等に於て洪水等の被害が最も莫大なる時には地頭に命じて血税にて修繕せしめる程度である、この國の幹線道路と云へば主都拉薩を中心として地方の主たる地方廳所在地に繋ぐ道路であるが、其の道路の如きも辛じて人馬の通れる位の幅員しかないところもあり又これが道路かと思はるゝ程自然的に廣いところもある、地方の道路に至つては名は道

路と云つても全く人々が意の儘に自然的に踏みならしたやうな道である箇所が多く、かやうなる状態であるから西藏の道路は近代的産業開發と關係を持つとか、國防上の見地からの所謂特殊道路とかの意義を持つ道路は全然なく、何等の目的もない道路と云つて敢へて過言ではない、加ふるに道路衛生等についても何等の考慮がないために道路の不潔なることは夥しい有様であつて、交通機關の如きは馬が唯一の機關である關係上馬の通行は比較的多いが、その馬糞は路面に山積してゐる有様である、大體以上で西藏の交通狀況の一般は想像出来るのであるが、乍併現在の西藏は所謂總に於いてラマ教以外には未開の狀況にあるが、將來世界國際情勢の急變……一大變遷は東亞と歐洲樞軸國家を繋ぐ一つの地帯として注目すべき地理的位置にある關係上この國の將來も必ずや現在の状態の儘にて桃源の夢を貪る譯けには行まいと思はれるのである、これが如何やうに變轉するだらうかは興味ある問題と共に決して吾人の等閑を附すべき問題でないのである。

### 『道路職員必携補遺』

比路志

「道路職員必携」は、道路改良會の發行に係り苟くも道路に關係ある方面に職を有する者は勿論道路に興味を有する者に取っては必讀すべき書籍で其の登載する所は道路經濟、交通調査、交通車輛、道路の設計（路線の選定幅員線形分配、土工、排水設備、鋪裝、工作物、橋梁、隧道、都市計畫街路、道路材料、維持修繕、用具機械等技術に關するものは勿論道路法規に至るまで凡そ道路に關する各般の方面に涉り調査研究の結晶である。此は既に世の定評ある處であるに鑑み其後修補する處があつたが今回更に別冊として「道路職員必携補遺」を刊行した夫れには鋼道路橋設計示方書案、荷重、設計細則、鋼道路橋製作示方書案等は勿論行政官廳職權委讓令を始め、重要産業團體令改正、陸運統制令の規定、道路標識中樣式追加等道路に關する法令を編纂し公にしたるものである、故に「道路職員必携」を有せらるる諸君は必ず本書を座右に備へざるべからざる重寶な書である。（定價 壹圓拾六錢）